



Data

監督：リー・ダニエルズ
脚本：ダニー・ストロング
出演：フォレスト・ウィテカー／オ
ブラ・ウィンフリー／ロビ
ン・ウィリアムズ／ジェーム
ズ・マースデン／リーヴ・シ
ュレイパー／ジョン・キュー
ザック／アラン・リックマン
／ジェーン・フォンダ／キュ
ーバ・グッディング・Jr／
テレンス・ハワード／ヴァネ
ッサ・レッドグレイヴ

👁️👁️ みどころ

1950年代から80年代のアメリカの現代史を、7人の大統領に仕えた黒人執事の目から見れば、『フォレスト・ガンブ』（94年）とは全然違う世界が・・・。

父親が白人に仕えるなら、俺は公民権運動だ！マルコムXだ！そんな長男との対立は必然だが、「父子の絆」の回復は一体いつ？「YES WE CAN！」の熱狂の中で黒人初のオバマ大統領が誕生したのは奇跡に近いが、「世界で唯一の大国」の地位は今、風前の灯火に・・・。

日本の戦後史を、歴代総理の執事の目から見ればどうなるの？それを考えながら、1950年代から80年代の日本の現代史を描いた映画を待望したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■アメリカ現代史を、黒人執事の観点から■□■

私は1967年に大学に入学したが、この頃から始まった学生運動の大きなテーマの一つは「ベトナム戦争反対！」。ケネディ大統領が平和の使者だというのは幻想で、「ケネディとアメリカ帝国主義」という文献なども必死で勉強したものだ。アメリカにおける黒人差別は、子どもの頃に読んだ小説『アンクル・トムの小屋』や陪審映画の名作『アラバマ物語』（62年）などでよく知っていたが、『マルコムX』（92年）を観た時は、こんな物語を全然知らなかつただけに大きな衝撃を受けた。

他方、戦後の平和な日本と違い、多くの国民が銃を持っている国・アメリカでは暗殺が必然（？）だが、1963年のケネディ大統領の暗殺、1968年のキング牧師の暗殺にはさすがに驚かされた。また、『夜の捜査線』（67年）などで有名なシドニー・ポワチエが黒人俳優としての名声を確立していくことに拍手を送る一方、『評決のとき』（96年）

などで観た「KKK（クー・クラックス・クラン、アメリカの白人至上主義団体）」の恐ろしさには、びっくりさせられた。「世界で唯一の大国」としてのアメリカは、ベルリンの壁が崩壊した1989年以降も、アフガン戦争（01年）、イラク戦争（03年）などを「遂行」してきたが、今やかなりヘタリ気味・・・。

私はアメリカの現代史をこんな風に見ているが、1950年代から80年代にかけて合衆国大統領の執事としてホワイトハウスの中から世界を見てきたセシル・ゲインズ（フォレスト・ウィテカー）の目からアメリカの現代史を見れば、さて・・・？

■□■50～80年代までの合衆国大統領は何人？■□■

私は12月3日の加古川商工会議所の「地方都市のまちづくり」の講演でも、12月12日の大阪大学法学部の実務法曹講座ロイヤリング「まちづくりの法と政策」の講義でも、「都市法制」を論ずるについては歴史的区分が重要であることを強調した。つまり、1945年の敗戦から2013年の今日まで、吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、福田赳夫、大平正芳、中曽根康弘、橋本龍太郎、小泉純一郎などの歴代総理を中心とした政権の流れの中で都市法制が形成されてきたことを理解する必要性を強調した。

他方、1949年生まれのは、1974年に25歳で弁護士登録をした後、10年間は公害問題を、1984年から今日までの30年間は都市問題をメインに活動してきた。そして今年、弁護士生活40周年を迎えた私は、つい先日『がんばったで！40年 ナニワのオッチャン弁護士 評論・コラム集』を出版したから、その40年間の活動と歴代政権による都市法制の動きを関連づけて説明することができた。そこで思うのは、1945年から2013年までの、日本の総理大臣の数がべらぼうに多いこと。2001年4月から2006年9月まで約5年間続いた小泉純一郎総理退陣の後、安倍晋三、福田康夫、麻生太郎と約1年毎に、そして民主党に政権交代した後も、鳩山由紀夫、菅直人、野田佳彦と約1年毎の交代だからひどいものだ。これに対して、セシルが1952年から1988年の間の36年間に仕えた合衆国大統領は何人？その答えは、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、ニクソン、フォード、カーター、レーガンの計7名だ。

■□■父と子の物語もダニエルズ監督が描くとこんな風に！■□■

シドニー・ポワチエの後に続く黒人俳優には、デンゼル・ワシントンやウィル・スミスなどの名優がゴロゴロいる。デンゼル・ワシントンもウィル・スミスも本作の主演を断つたらしいが、本作でセシル・ゲインズ役を務めたフォレスト・ウィテカーは、何といっても『ラストキング・オブ・スコットランド』（07年）における、ウガンダの独裁者イディ・アミン役の印象が強烈だった（『シネマルーム14』106頁参照）。したがって、本作にみる従順な執事役ではその正反対の演技が要求されるから、何とも意外なキャスティングだ。

息子のジェイデン・スミスが「師弟の絆」をテーマとし、ジャッキー・チェンと共演した『ベスト・キッド』（10年）で名演技を見せたことにジェラシーを感じた（？）父親のウィル・スミスは、『アフター・アース』（13年）でJ. Sと共演したが、その「父と子

の絆」というテーマは割と単純なものだった（『シネマルーム31』252頁参照）。それに対して、本作はストーリー的にはあくまでセシルが仕える歴代大統領とその執事の目から見たアメリカ合衆国の現代史だが、その底を貫くテーマは「父子の絆」だ。

『アフター・アース』は対立した父と子が危機的状況下、二人三脚で任務を達成していく中で父子の絆を取り戻すストーリーだったが、本作にみる父子の対立はもっと深刻。だって、ハウス・ニガー（家働きの奴隷）から大統領の執事にまで昇りつめた父親は、白人が支配するアメリカ合衆国に忠誠を誓い、ひたすら大統領に尽くすのに対し、長男のルイス・ゲインズ（デヴィッド・オイェロウォ）は若い頃から公民権運動に参加し、キング牧師死亡後はマルコムXやブラック・パンサー党（黒豹党）の活動に参加するのだから。本作を製作・監督したリー・ダニエルズは、初プロデュース作品の『チョコレート』（01年）では、ハル・ペリーのすごい演技を引き出し（『シネマルーム2』43頁参照）、監督2作目の『プレシャス』（09年）では、ハーレムに生きる巨大な肉体を持つ16歳の黒人の女の子の力強い生き様を見事にアピールしたアフリカ系アメリカ人（『シネマルーム24』24頁参照）。そんな名監督が描けば、父と子の物語もこんな風に！

■□■空気になれ！何事もプロになるのは難しい！■□■

『アングル・トムの小屋』にみるアングル・トムでも、『風と共に去りぬ』（39年）にみるスカーレット・オハラも、黒人の召使いは従順にご主人に尽くしているが、「ある事情」によって子どもの頃から「ハウス・ニガー」になったセシルを見ていると、ハウス・ニガーがいかなる目で見られていたかがよくわかる。一面ではそんな安住の地位を放り出して旅に出たセシルは、メイナード（クラレンス・ウィリアムズ三世）に拾われたことによってホテルの執事という立派な仕事に就くことができたが、これはラッキーという他ない。

日本でも上流階級や金持ちの家では、召使いやお手伝いさんという職業があるが、そんな仕事で一流になるための条件は一体ナニ？もちろんその前提として、言葉遣いは丁寧に、服装はきっちりと、動作は優雅に、等々の要求もあるが、それ以上に大切なことは、相手の心を読むこと、動きを予見すること、そして、それをさりげなく提供することだ。食事中はもちろん、会議中にお茶を出す時でも、その会話に興味を示したりすることは厳禁！宮本武蔵は『五輪の書』で剣術の極意を説いたが、メイナードがセシルに徹底的に教え込む執事の極意は、「空気になれ！」ということだ。

私は常々、プロ中のプロと言えるような弁護士を目指しているし、事務局スタッフにも事務局員としてのそれを要求しているが、メイナードがセシルに要求する「空気になれ！」はそんなレベルをはるかに超えた高難度のもの。しかし、長年その極意に触れながらホテルの執事という仕事をしてきたからこそ、セシルに大統領の執事という仕事が回ってきたわけだ。何事もプロになるのは難しいが、セシルのような幸運に恵まれるかどうかは別として、やはり日常の努力が大切ということだ。

■50～80年代の日本の現代史を描いた映画を待望！■

『フォレスト・ガンブ』（94年）は、トム・ハンクス扮するフォレスト・ガンブという白人青年の目を通して1950年代から80年代のアメリカ現代史を描いた名作だった。そのため、マスコミは本作を『フォレスト・ガンブ』の黒人版』と称したらしい。プレシートには、町山智浩氏（映画評論家）の『フォレスト・ガンブ』が隠したアメリカ史を暴く『大統領の執事の涙』と題するコラムがある。そこで解説されている、1950年代から80年代のアメリカにおける黒人の歴史は『フォレスト・ガンブ』が全く描かず、本作がはじめて（体系的に）描いたものだから大いに勉強になる。

私は、読売新聞が長期連載している「昭和時代」を愛読しているが、その第1部は「昭和30年代」、第2部は「戦後転換期（1965年～79年）」、第3部は「戦前・戦中期（1926年～44年）」の日本の現代史を描いている。来る12月21日に公開される百田尚樹原作の映画『永遠のゼロ』（13年）（『シネマルーム31』132頁参照）は、今時の若者たちにもゼロ戦とは？特攻とは？そして、あの戦争とは？を考えさせる絶好の教材になると期待しているが、さて若者たちの日本の現代史に対する興味は？

しかして、私は『フォレスト・ガンブ』や本作と同じように、日本の1950年代から80年代の現代史を描いた名作を誰かに作ってもらいたいと願っているが・・・。



『大統領の執事の涙』

2014年2月15日（土） 大阪ステーションシティシネマ他全国ロードショー

©2013, Butler Films, LLC. All Rights Reserved.

■本作で観ると、「YES WE CAN!」も感動的■

日本では、去る11月15日にアメリカの日本大使に就任し来日した、キャロライン・ケネディ氏の人気うなぎ登りだが、2009年にアフリカ系アメリカ人として初の合衆国大統領に就任したオバマ大統領の影は近時どんどん薄くなっている。これは対外的には、①イラン戦争の後始末がうまく進まないこと、②エジプトやシリア問題についてリーダーシップを発揮できなかったこと、対内的には、①2期目の選挙で大いに苦戦したこと、②アメリカの財政問題を適切に解決できないこと等々が理由だ。しかし、日本の最も重要な同盟国であるアメリカがこんな体たらくでは、中国から「太平洋をアメリカと中国で二分しよう」と提案されたり、一方的に防空識別圏を設定されたりと、中国の思いのままになっていく危険がある。4年前の「YES WE CAN!」の熱狂は一体どこへ行ってしまったの？今では、そう思わざるをえないが、2009年の大統領選挙でオバマが勝利したことにセシルたちはどれほど感激したことだろう。

本作中盤は、1988年に大統領執事を辞めたセシルが、今なおデモの先頭に立って戦っている長男ルイスのもとに赴き、「俺もデモに参加させてくれ」と申し出るセシルとルイスの二人が抱き合う感動的なシーンが登場する。これはレーガン大統領の末期の頃だ。その後、合衆国大統領はレーガン、ジョージ・H・W・ブッシュ、クリントン、ジョージ・W・ブッシュを経て、2009年のオバマ大統領の誕生となるわけだが、あの時の「YES WE CAN!」の合唱には、1961年に合衆国最年少の大統領としてケネディが登場した時以上の期待が込められていたはずだ。一方では、そんな感動を本作で再確認しつつ、他方では、現実のアメリカの姿もしっかり分析したい。

2013（平成25）年12月16日記

オバマ大統領の求心力の低下と米国の退潮をどう読み解く？

1) 4月23日～25日の2泊3日によるオバマ大統領の「国賓」としての来日は、1996年のクリントン大統領以来18年ぶり。これは米国大統領が形式よりも実質を好むことの表れだが、98年の江沢民、08年の胡錦濤と、中国の国家主席（党主席）が2度も国賓として来日していることに比べると如何なもの？「尖閣は日米安保の対象」と明言してくれたのはうれしいが、TPP交渉では強硬さが目立った。

2) 一強多弱体制下にある安倍政権は盤

石だが、残り3年弱のオバマ政権は脆弱。共和党はもとより、ヒラリー・クリントンの野望(?)もかなり明白に!

3) ウクライナ政府と親ロシア派の対立にオバマはいかなる指導力を? そんな状況下、「YES WE CAN」の熱狂も、「核廃絶宣言」も今は色褪せてしまった。韓国との同盟強化、フィリピンの基地への米軍再配備等、「太平洋を米中で二分しよう」との提案を断固拒否しているのはうれしいが、さて?

2014（平成26）年5月2日記